

早稲田大学大学院日本語教育研究科

修士論文概要

論文題目

移動する子どもが書くことを通して学ぶ

ことばの力

—関係性構築を目指した年少者日本語教育—

角屋 智栄

2011年3月

第1章 研究の背景

年少者日本語教育において、成長発達を支えるためのことばの教育の必要性が問われている。それは、ことばの発達の観点、子どもの発達への意識が不十分であることによるものであると考えられる。しかし、どのようにことばの教育を通して成長発達につなげていくのかは明らかではない。1章では、筆者の経験にもとづく問題意識と問題の所在について述べたうえで、本研究の目的を次のように設定する。

- (1) 移動する子どもが書くことを通して学ぶことばの力を明らかにすること。
- (2) 移動する子どもの発達を書くことから支えるために必要な日本語教育について明らかにすること。

そして、1-5では、本論の構成を述べる。1-6では、本論で扱う語の定義を行う。

第2章 先行研究

2章では、先行研究を整理し、本論の位置付けを明確にする。

2-1では、年少者日本語教育における発達の観点の重要性について述べる。先行文献における「発達」の定義を探るため、2-2で「発達」の定義を発達心理学の観点から述べる。それらを踏まえ、年少者日本語教育において目指される発達とはどのようなものなのか、を述べる。

2-3では、子どもの発達とことばの発達の関わりについて述べる。2-3-1では、子どもは、周囲の人間と関わりながら成長・発達している存在であり、ことばの発達とともに、思考を深めたり、他者と関係性を築いたりするということを述べる。そして、2-3-2では、子どもの発達にことばを「書く」ことが意味のあることであると述べる。

2-4では、年少者日本語教育における「書くこと」の意味とその指導について概観する。2-4-1では、書く力への評価方法に疑問を提示する。従来の年少者日本語教育においては、「書く力」は生徒の作文によって判断されているため、生徒がどのように考えて書いたのかという「過程」が明らかになっていない。また、作文を書くためにどのような指導が行われていたのかを具体的に示している実践例は少ない。作文は、「書く力」の一部の側面しか表さず、その過程での思考や教師と生徒とのやりとりが見えてこない。2-4-2では、年少者日本語教育における「書くこと」の意味とその指導について、「書くこと」を子どもの発達のなかに位置づけ、ことばの力を伸ばすことを目指した実践研究を概観する。2-4-3,2-4-4では、本研究の対象となる中学生への書く指導のうち、子どもが書く過程に注目した実践

について述べる。そして、本研究の立場を述べる。

年少者日本語教育では、実践者が子どもの書く過程に寄り添いながら、思考を引き出すようにやりとりしたり、モデルを示したりすることだけでなく、子ども自身が「書きたい」という気持ちを持てるようにすることが重要であり、子どもと実践者を含めた周囲の人と関係性を育むことが必要なのではないだろうか。そして、子どもの成長・発達を支えるためには、そのような関係性を構築しながら、年少者日本語教育を行うことができるのではないだろうか。

第3章 研究の方法

3-1 では、本研究の方法である関与観察について述べる。また、観察の記録を分析するにあたり使用したデータについて示す。3-2 では、4・5 章で扱う日本語教育実践の概要について述べる。

第4章 中学生生徒 K への実践

4 章では、子どもが「書くこと」からどのようなことばの学びを身につけていったのかを、K の実践より明らかにする。

4-1 で生徒の概要について述べる。実践の概要は表 1 に示すとおりである。

表 1 日本語教育実践の概要

期間：2009 年 10 月から 2010 年 2 月、計 16 回。 生徒：中学 1 年生。韓国より 1 年の予定で来日。 形態：週 1 回 2 時間の取り出し指導。
--

実践のうち、子どもと筆者が行った「交換ノート」活動に注目した。これは、子どもが周囲の人とことばを使ってやりとりをすることに繋げるために行われたものである。

4-3-3 では、交換ノート活動で見られた子どものことばの学びについて明らかにした。ことばの学びとして、「表現したいこと」の表れ、書くことから話すことへ、自分の気持ちを表現することへ、日本語授業へのより主体的な参加へ、という観点から分析を行った。分析により、K が書くことを通して、ことばの学びを深めていったことを示す。

第5章 中学生生徒 H への実践

5章では、子どもが「書くこと」でどのようなことばの学びがあったのかを明らかにする。

5-1では生徒の概要について述べる。実践の概要は表2に示すとおりである。

表2 日本語教育実践の概要

期間：2010年5月から2010年10月、計11回。

生徒：中国より来日。

形態：週1回2時間の取り出し指導。

Hは、内面に「伝えたい」ということがあるにも関わらず、その表現や方法についてわからずに混乱し戸惑う様子が見られていた。そこで、Hの「伝えたい」ことを引き出すために、「文章の型」をもとにブレインストーミングややりとりをするという書く過程を作って指導を行った。そして、子どもの内面にある多様な「伝えたい」ことやその気持ちを、伝えたい相手に伝わるように、文章の型を通して表現する方法を身につけていった様子を示す。また、その様子を通して、Hにとって意味のある過程を作りだすために実践者としてどのように働きかけを行っていたのかを分析する。

第6章 考察

6章では、4章・5章での実践の分析を踏まえ、以下の3点から考察を行った。

1. 書くことを通して見られた子どものことばの学びとはなにか
2. 書くことの指導を通して起こった実践者の学びとはなにか
3. 移動する子どもの発達を書くことから支えるとはなにか

6-1では、「書くこと」を通して身に付けた子どものことばの学びについて、それぞれの子どもにとっての学びを考察した。Kは書くことから「ことばの学び」を広げていった。Kは、「書く」という文章を構築する過程から、人との関係性を構築していくようになったとすることができる。そして、書くことで関係性は構築しながら、変容もしていくことが考えられる。一方、Hは書くことで「ことばの学び」を深めていった。文章の型を元に書くことで、自分の考えを整理して相手に伝えることのできることばの力を身につけつつあるとすることができる。

6-2では、書くことの指導による実践者の学びについて考察した。書くことの指導による

実践者の学びとは、年少者日本語教育実践とは、子どものことばの力を捉え、その学びの様子によって生まれるということである。子どもが必要な日本語教育を、実践を行いながら考え、そのために、子どものことばの力やその学びを常に実践において意識しながら、実践をする必要があるということである。

6-3 では、移動する子どもの発達を書くことから支えるためには、過去・現在・未来を通じて、子どもが書くことによって自らの考えを深めたり、整理したりすることで、他者とことばのやりとりを通して関係性を構築できるようなことばの教育が必要となることを述べた。

第7章 結論

7章では、本論の結論を述べる。

ことばの発達とともに、認知的思考や情緒的な成長・発達の過程にある子どもにとって、今と、様々な場でことばを用いて他者と関係を構築し、学んでいくであろう将来をつなぐためには、自らが生きる「今」をその時々々の気持ちや感情を自分のことばで捉え、考えることが必要となる。その際に、書くことは、自分の考えや思いを整理し、他者に伝わるように表現しようとする考えに繋がる。

また、本研究の課題として、実践期間では、限定的な関係性の構築にしかつながらなかったことが挙げられた。また、Hの場合は、伝えたい内容を書く力を伸ばしていくためには、文章の型の指導とともに、文法など正しく伝えるための指導も必要であることが挙げられた。

参考文献

- 生田裕子 (2006) 「ブラジル人中学生の『書く力』の発達—第1言語と第2言語による作文の観察から—」『日本語教育』128号, pp.70-79.
- 池上摩希子 (1994) 「教授・学習過程における積極的な個別化に関する考察と提案」『中国帰国者定着促進センター紀要』3号, pp.108-127.
- 池上摩希子 (2009a) 「日本のJSL教育の意義を問い直す—『年少者日本語教育学』の構築—」川上郁雄ほか編, 『ことばの教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振—』ココ出版, pp.138-141.
- 池上摩希子 (2009b) 「年少者日本語教育における実践と研究—『実践を語る』意味」川上郁雄ほか編, 『ことばの教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振—』ココ出版, pp.228-237.
- 池上摩希子, 大上忠幸, 小川珠子 (2003) 「実践報告: 中高学年児童クラスにおける『書くこと』の指導・再考」『中国帰国者定着促進センター紀要』10号, pp.31-58.
- 石井恵理子 (2009) 「年少者日本語教育の構築に向けて—子どもの成長を支える言語教育として—」川上郁雄ほか編, 『ことばの教育を創造する—ESL教育とJSL教育の共振—』ココ出版, pp.142-164.
- 内田伸子 (1990) 『子どもの文章—書くこと・考えること—』東京大学出版会.
- 内田伸子 (2009) 「作文の推敲課程における語の選択—言葉を選ぶこと・考えを発見すること—」『日本語教育』140号, pp.4-14.
- 大西道雄 (2004) 『作文教育における文章化過程指導の研究』溪水社.
- 岡本夏木 (1982) 『子どもとことば』岩波書店.
- 岡本夏木 (1985) 『ことばと発達』岩波書店.
- 岡本夏木 (1987) 「ことばと人間形成」『岩波講座 教育の方法4 ことばと教育』岩田純一ほか, 岩波書店, pp.2-21.
- 小川珠子, 齋藤恵 (2007) 「『文章の型』を利用した作文プログラムの施行—所沢センター中学生クラスにおける実践から—」『中国帰国者定着促進センター紀要』11号, pp.58-80.
- 尾関史 (2009) 「JSLの子どもの成長・発達を支えることばの力を育てる—子どもの主体的な学びをデザインする—」川上郁雄編, 『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー—主体性の年少者日本語教育学—』明石書店, pp.38-60.

- 小田珠生 (2005)「中国人中学生が支援者との協働による作文生成において解決した問題—」
『世界の日本語教育』 15, pp.207-222.
- 角屋智栄 (2010)「自分を表現する『ことばの力』の把握—『交換ノート』活動からの実践者の気付き—」『年少者日本語教育実践研究』 No.14, pp.23-30.
- 唐木澤みどり (2010)「JSL 児童が『書く』活動に参加するための日本語支援—『ポスター活動』の支援実践から—」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する—』 1, pp.23-45.<<http://www.gsjal.jp/children/journal.html>>
- 川上郁雄 (2004)「新時代の日本語教育をめざして—子どもたちがことばを習得するとき—」『日本語学』 9, vol.23 明治書院, pp.78-89.
- 川上郁雄 (2006)「年少者日本語教育実践の観点—「個別化」「文脈化」「統合化」—」川上郁雄編,『「移動する子どもたち」と日本語教育—日本語を母語としない子どもへのことばの教育を考える—』 pp.23-37.
- 川上郁雄 (2008)「実践と『教材』はどう結びつくのか—年少者日本語教育における『実践的教材論』の試み—」『WEB リテラシーズ』 5.2,くろしお出版, pp.10-18.
- 川上郁雄 (2009a)「主体性の年少者日本語教育を考える」川上郁雄編,『「移動する子どもたち」の考える力とリテラシー—主体性の年少者日本語教育学—』 pp.12-37.
- 川上郁雄 (2009b)「動態性の年少者日本語教育とは何か」川上郁雄編,『海の向こうの「移動する子どもたち」と日本語教育—動態性の年少者日本語教育学—』 pp.16-39.
- 川上郁雄 (2009c)「日本語能力の把握から実践への道すじ—『JSL バンドスケール』の意義と有効性—」川上郁雄ほか編,『ことばの教育を創造する—ESL 教育と JSL 教育の共振—』 ココ出版, pp.173-175.
- 川上郁雄 (2009d)「リテラシーはどこにあるのか」リテラシーズ研究会編『リテラシーズ—ことば・文化・社会の日本語教育へ—』 4, pp.182-188.
- 川上郁雄 (2010)「『移動する子どもたち』のことばの教育学とは何か」『ジャーナル「移動する子どもたち」—ことばの教育を創発する—』 1, pp.23-45.<<http://www.gsjal.jp/children/journal.html>>
- ギボンズ, ポーリン (2009)「ことばのレンズを通して教科学習を考える」川上郁雄ほか編,『ことばの教育を創造する—ESL 教育と JSL 教育の共振—』 ココ出版, pp.44-72.
- 鯨岡峻 (1999)『関係発達論の構築』 ミネルヴァ書房.
- 倉地曉美 (1992)『対話からの異文化理解』 勁草書房.

- 齋藤ひろみ (2001) 「実践報告：日本語学習初期段階における作文指導について考える—63期子どもクラスの作文の授業実践を基に—」『中国帰国者定着促進センター紀要』9号, pp.92-135.
- 齋藤ひろみ, 佐藤郡衛 (2009) 『文化間移動をする子どもたちの学び—教育コミュニティの創造に向けて—』ひつじ書房.
- 柴山真琴 (2006) 『子どもエスノグラフィー入門—技法の基礎から活用まで—』新曜社.
- 園原太郎編 (1980) 『認知の発達』培風館.
- 田近洵一編 (2002) 『子どものコミュニケーション意識—こころ、ことばからかかわり合いをひらく—』学文社.
- 館岡洋子 (2007) 「ピア・ラーニングとは」『ピア・ラーニング入門—創造的な学びのデザインのために』池田玲子・館岡洋子, ひつじ書房, pp.35-69.
- 千葉堯 (1991) 『教育・発達の心理学』ナカニシヤ出版.
- 東京外国語大学留学生日本語教育センター編 (1998) 『外国人児童生徒のための日本語指導 第1分冊—カリキュラム・ガイドラインと評価—』ぎょうせい.
- 中島誠 (1999) 「情動的・動作的認知の発達と言語発達—健常児・障害児に共通な発達過程を考える」中島誠, 岡本夏木, 村井潤一, 『シリーズ人間の発達7 ことばと認知の発達』東京大学出版会, pp.75-137.
- 波多野誼余夫編 (1996) 『認知心理学 5 学習と発達』東京大学出版会.
- 南雅彦 (2009) 『言語と文化—言語学から読み解くことばのバリエーション—』くろしお出版.
- 茂呂雄二 (1987) 「児童の作文」福沢周亮編『子どもの言語心理 1 児童のことば—現代心理学ボックス 79』大日本図書, pp.127-160.
- 文部科学省 (2009) 「日本語指導が必要な児童生徒の受け入れ状況等に関する調査 (平成20年度) の結果について」『文部科学省ホームページ』2010年12月20日, <http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/21/07/1279262.htm>
- 山岸明子 (2009) 『発達をうながす教育心理学—大人はどうかかわったらいのか—』新曜社.
- 山崎遼子 (2006) 「JSL 生徒への高校入試作文支援において必要な視点—明日『一人』で書くためのスキュフォーリング—」『早稲田大学日本語教育実践研究』4, pp.29-39.
- 弓野憲一編 (2002) 『発達・学習の心理学』ナカニシヤ出版.

吉田直子, 片岡基明編 (2003) 『子どもの発達心理学を学ぶ人のために』 世界思想社.

早稲田大学大学院日本語教育研究科年少者日本語教育研究室 (2004b) 『JSL バンドスケール 2004 試行版 中学・高校編』.